

博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨

氏名（本籍） デチェン・ドマ（ブータン）
Dechen Doma

学位の種類 博士（社会福祉学）

学位記番号 博福乙第2号

学位授与年月日 令和4年3月15日

学位授与の要件 淑徳大学学位規程第3条第5項

学位論文題目

At the Interface of Buddhism and Western Approaches to Youth Substance Abuse in Bhutan : A comparison of client and agency understanding of treatment and effectiveness

ブータンの青年の薬物乱用に対する仏教的・西洋的アプローチの接合（接点）にて：機関による実践及びその効果に対するクライアントの理解の比較を踏まえて

審査委員

委員長 教授 小川 恵

委員 講師 松菌 祐子

委員 東京保健医療専門職大学
リハビリテーション学部 教授
柳澤 孝主

委員 クライスト大学指導官
ヌープラ・スンダレッシュ
Noopura Sundaresh

【論文内容の要旨】

Thesis summary

The increasing rate of substance abuse and addiction especially related to cannabis, among the youth population has become a social concern in Bhutan. With the development of a number of treatment responses, it is timely to undertake an in-depth study to understand the impact of the Bhutanese cultural context on the clinical approaches taken by various agencies and the factors that contribute to the effectiveness of the treatment approaches. Through document analysis, four treatment contexts in the field of substance abuse and addiction were distinguished in Bhutan: i) Government agencies represented by the Bhutan Narcotics Control Authority(BNCA), Ministry of Health, Ministry of Education, Education and Training Institutions; ii) Buddhist monasteries, comprising of Buddhist monks from the Zhung Dratshang(Central Monastic Body); iii) Civil Society Organizations, comprising of two rehabilitation centres -the Institute of Wellbeing and Samzang Residential Drug and Alcohol Rehabilitation Centre and iv) Community Outreach, represented by the Buddhist monk. Participants across the four treatment contexts including 20 clients and 18 program implementers were interviewed for the study. Three main themes emerged from the data namely distinguishing treatment approaches; factors contributing to the effectiveness of treatment; and antecedents to substance abuse and addiction.

This study employed two phases of data collection. In phase 1, review of the four identified treatment contexts via document analysis revealed four broad treatment approaches for further exploration: Western approach, Buddhist approach, Community Outreach approach and Mindfulness-based approach. These categories were explored in the analysis of the data generated in the interviews conducted in Phase 1. Phase 2 data collection emerged from Phase 1 data on the basis of difference between program implementers and clients' perceptions of factors contributing to the effectiveness of treatment. Phase 2 of data collection was divided into three parts. Data responses from clients in Phase 1 was analyzed to construct a rating scale; the rating scale question was administered to program implementers (n-18); and data via open-ended interviews were collected from program implementers on factors contributing to effectiveness of the treatment approaches.

This study revealed the adoption of four distinct treatment approaches in the four treatment contexts namely the Western approach involving the application of the conventional counselling and therapeutic approaches; Buddhist approach or the *Choeshed Layrim* which includes religious educational discourse centered around looking into one's inner goodness and understanding the Buddhist belief in "karma" -

cause, conditions and effect: Community outreach services primarily done through volunteerism without any formal association to any organization; and Mindfulness-based treatment approaches which mainly involves mind training, meditation and introspection. Mindfulness-based treatment approaches were found to be further divided into Western secular mindfulness and Contemplative mindfulness; the latter integrating both Buddhist principles and Western psychology. Of these four main approaches, the mindfulness-based approach was found to be the most prominent, and its implementation in the four treatment contexts was found to be dependent on the program implementers' own knowledge and skills in the practice of mindfulness. Interestingly, irrespective of the application of Western secular mindfulness or Contemplative mindfulness approach in the treatment, the Buddhist influences was evident given the Buddhist religious background of the majority of the participants.

When it came to distinguishing the factors contributing to treatment effectiveness, the study revealed that personal qualities of the program implementers such as caring and having a positive nature, including being non-judgmental were identified by both the clients and program implementers as the key contributors to the effectiveness across all treatment approaches. The study concluded that this valuing of personal attributes is likely guided by the cultural and religious setting of Bhutan as most of the program implementers views are predominately based on Buddhist philosophy which is deeply embedded in their culture and values. While clients in turn, because of the values and culture setting of Buddhism would be attuned to and place value on the role of positive personal qualities.

This study has indicated some implications for policy, practice and the status of knowledge in the field of treatment approaches especially for stakeholders in Bhutan; as well as direction for further research. This study provides a credible baseline for Bhutan Narcotic Control Agency, civil society organizations, government agencies, education sectors and other relevant stakeholders. In addition, this study also provides a baseline for future researchers to conduct research related to youth substance abuse and addiction treatment in Bhutan. In conclusion, the significance of this study revealed that treatment of youth substance abuse and addiction in Bhutan indicates that treatment approaches across different treatment contexts are impacted by the interface of Buddhism with both clinical Western approaches and contemporary secular mindfulness-based approaches. While a high value placed on personal qualities of program implementers in terms of effectiveness of treatment, further supports the interpenetration of Buddhism and Western approaches within the Bhutan context.

Key words: Buddhist approach, Western approach, Mindfulness-based approach, substance abuse, addiction, treatment contexts, Choeshed Layrim.

【論文審査の要旨】

デチェン・ドマ氏（ブータン）の博士学位請求論文の審査・要旨は、以下の通りである。

1. 審査委員会の評価基準

本審査委員会では、社会福祉学専攻博士後期課程学位論文（博士）評価基準に基づき、以下の15基準を評価基準とした。

- ①大学院要項の「博士学位請求論文の提出書類の書式等についての内規」に適合しているか。
- ②先行研究を的確（量や質、批判的考察）に捉えているか。
- ③問題・目的の設定が明確であり適切であるか。
- ④専門領域に照らして研究の意義が明確であるか。
- ⑤研究目的に照らして、研究方法ならびにデータ収集、分析方法が正確かつ適切か。
- ⑥学術上の創意工夫がなされているか。
- ⑦論理の展開に一貫性があり、論文中の議論は説得力があるか。
- ⑧設定した研究課題の解明が的確・適切になされているか。
- ⑨研究結果が明確に述べられていて、結果に対する考察が的確であるか。
- ⑩考察及び結論には新しい知見が含まれておりオリジナリティがあるか。
- ⑪今後の課題が検討されているか。
- ⑫研究倫理上の配慮がなされており問題はないか。
- ⑬引用文献や参考資料は正確かつ適切か。
- ⑭関連領域の学術誌・紀要等に研究論文として掲載されるレベルであるか。
- ⑮学会において一定の評価が得られるものであり、かつ社会福祉学に貢献できるものであるか。

本審査委員会は、以上の評価基準を総合的に踏まえて、申請者が①から⑮の課題をクリアしているか否かについて審査した。論文審査では、これら15の課題のうち、②～⑪までの課題について検討した。また、①については予備審査において検討を行い、更に、残りの⑫～⑮の課題については、論文審査及び口述試問の結果をもとに最終的な判断を行った。

2. 評価と批評（審査報告）

本論文の審査については、以下の口述試問での確認事項の明証性にあるものと判断し、以下の点を中心に最終的な判断を行った。

口述試問における確認事項は以下の5点である。

- ① 本論では、ソーシャルワークの個別的・直接的アプローチ（ケースワーク）やカウンセリングへの探求が中心になっている。ソーシャルワークのメゾ・マクロ視点についてどのように考えるか。
- ② 社会問題として薬物問題を捉えるのであれば、行政や医療に向けてのマクロな視点（①の視点）は不可欠となるのではないかと判断した。直接的・個別的なケースワークやカウンセリングのみでは、どうしても事後的対応だけに終始するか、再発への予防的（preventive）措置にとどまるのではないかと判断した。社会問題への根本的・予防的解決にと

っては、メゾ・マクロからのソーシャルワーク的働きかけが必要になると思われるがどのように考えるか。

- ③ コミュニティ・アウトリーチ活動の今後の可能性についてどのように考えているのか（本論文ではインタビュー調査は1例のみだが）。本事例はブータンにおいて、ある程度一般的な活動なのか、または先進事例なのか、今後には拡張していけるものなのか。
- ④ コミュニティを失った若者への、“新たな”コミュニティづくりの施策的提言が具体化されていない。アジア型（あるいは仏教的）ソーシャルワークの視点から明確な展望を求める。
- ⑤ データ分析の視点として欧米発祥の社会構築主義的（constructivist）パラダイムを採用しているが、ブータンという文化的文脈（context）を加味したカテゴライズや解釈が曖昧である。著者自身の視点の独自性の明確化を求める。

以下、最終的な論文の評価について述べる。

①の指摘について著者は、論文のタイトルを変え、1章において、これまで先行研究が存在しないブータンにおける薬物使用に対する対処を、i) ブータン麻薬規制当局、保健省、教育省及び教育訓練関連機関など政府機関、ii) 中央仏教寺院教会所属の僧侶を含む仏教寺院、iii) 市民社会組織、iv) 非ブータン人僧侶によるコミュニティ・アウトリーチの4つに大別した。さらに、ミクロなカウンセリングを離れ、その方法論を、1) 西洋型アプローチ、2) 仏教型アプローチ、3) コミュニティ型アプローチ、そして、4) マインドフルネスに基づくアプローチの4つの接遇・治療（treatment）コンテキストがあると分析したこと自体がマクロならびにメゾ的な視点でのソーシャルワーク的研究であると主張した。

②について、著者は社会問題への根本的・予防的解決としての、メゾ・マクロからのソーシャルワーク的働きかけが必要ではないかという問いかけに対しては、ブータン文化に根ざす仏教的慈悲（compassion おもいやり）とブータン固有の価値である Gross National Happiness (以下 GNH) の実践が西洋型の薬物乱用へのケアでの基本的態度であると主張した。この点は、著者の論点である賃金労働以外の互酬性のネットワークで生活できていた伝統型の社会構造が崩れたこと、そのため雇用状況の偏在が生じ、ディアスポラとして都市部に移住し賃金労働者を目指さざるを得ない階層が生じ、とりわけその子弟である若年層に多様な生活ストレスを招き、薬物問題を起こしていると状況分析。および、都市部への人口の急激な移動とそこで進む貧困を伴う核家族化における個人のアノミー化をもたらす孤独を明確にし、仏教文化に基づく文化的伝統の中に回収することで孤独を癒す地域社会の保護的基盤の喪失という分析。文化的にも社会的にも孤独になった若者同士が不安回避や不安軽減のためにマリファナの共同使用という形で孤独の不安へのストレス・コーピングを行うという分析、などと矛盾するのではないかという指摘に対し、今後の研究発展で修正し更に発展させたいと返答した

③について、本論文では1例のみのインタビュー調査であった外国人僧侶によるコミュニティ・アウトリーチ活動の今後の可能性について説明を求めたところ、その活動のソーシャルインクルージョンを目指した就労支援までの考え方に言及し、ブータンにおいては

特異な先進事例ではあるが、広く周知され、今後若者が後に続くことで拡張していける可能性がある」と説明した。

④の要求コミュニティを失った若者への、“新たな”コミュニティづくりの施策的提言が具体化されていない、アジア型（あるいは仏教的）ソーシャルワークの視点から明確な展望が欲しいという問いに関しては、曖昧ではあったが、返答からは、③での説明であるコミュニティ・アウトリーチにその可能性がある」と審査者は理解した。

⑤の指摘、データ分析の視点として欧米発祥の社会構築主義的（constructivist）パラダイムを採用し、ブータンという文化的文脈（context）を加味したカテゴリーや解釈が曖昧であり、著者自身の視点の独自性の明確化を求めた件については、インサイダーとしての視点を自覚している点が独自であると主張した。社会学的あるいは文化人類学的には、ある事象を極力普遍的に価値中立的に構成した概念で描き出し、その判断基準（本論文であればICD10やDSM5を踏まえたWHOの行動指針や精神医療における近年の動向であるハームリダクションなど）を当てはめ、そこに浮かび上がる疾患の症状や病理現象を扱おうというエティック（etic）な方法論からみて不十分である。また、逆に民族誌的な多様さを理解する方法としての観察を通じ、病むことの持つ多様さや複雑さとして生きる人の内側を描こうとし、ある文脈での説明によって明らかにされるものへの関心を示し、その生の文脈において把握するイーミック（emic）な手法としても不十分ではあった。例えば、本論では口述の質問で非ブータン人僧侶の活動の意義が説明出来ていたが、それを慈悲やGNHと結びつけて説明は出来ていなかった。

しかし、著者が繰り返し主張した、本研究がブータンの薬物乱用についての包括的先駆的な研究であり、その治療における実態を示すことが今後のブータンにおけるソーシャルワークに寄与することが研究の意義であるという目的に照らすならば、①から④において自文化の対象化と抽象化がある水準で行われたことで当初の目的が達成されていると評価出来た。以上研究上の課題はあるが、それらを求めるのは今後の研究の進展に委ねることによしと判断した。

3. 論文審査及び最終試験の結果

本審査委員会は、令和3年9月から令和4年3月まで、6ヵ月余にわたり、デチェン・ドマ氏（ブータン）の論文提出による博士学位請求論文の、その妥当性及びその可否について、また、論文内容について審査を行ない、令和4年2月24日に、口述試問による論文内容の最終審査及び最終試験を実施した。

さらに、同年3月10日には、淑徳大学大学院総合福祉研究科主催による公開審査会が行なわれ、デチェン・ドマ氏（ブータン）の論文提出による博士学位請求論文が審査された。本審査委員会は、以上の審査及び口述試問と公開審査会におけるデチェン・ドマ氏（ブータン）の成績を基に、同氏の論文提出による博士学位請求論文を「合格」とした。

4. 学位授与の可否についての意見

以上、審査の結果、本審査委員会は、令和4年3月10日の最終審査委員会において、デチェン・ドマ氏（ブータン）に博士（社会福祉学）の学位を授与することを「可」と認めた。